

I am a Cat – Chapter 7a (Natsume Sōseki)

なな
七

わがはい ちかごろうんどう はじ ねこ くせ き ふう いちがい れいば さ てあい
吾輩は近頃運動を始めた。猫の癖に運動なんて利いた風だと一概に冷罵し去る手合にちよ
っと申し聞けるが、そう云う人間だってつい近年までは運動の何者たるを解せず、食って
寝るのを天職のように心得ていたではないか。無事是貴人とか称えて、懐手をして座布団
から腐れかかった尻を離さざるをもって旦那の名誉と脂下って暮したのは覚えているはず
だ。運動をしろの、牛乳を飲めの冷水を浴びろの、海の中へ飛び込めの、夏になったら山
の中へ籠って当分霞を食えのとくだらぬ注文を連発するようになったのは、西洋から
神国へ伝染した最近の病気で、やはりペスト、肺病、神経衰弱の一族と心得ていい
くらいだ。もっとも吾輩は去年生れたばかりで、当年とって一歳だから人間がこんな病気に
罹り出した当時の有様は記憶に存しておらん、のみならずその砌りは浮世の風中にふわつい
ておらなかつたに相違ないが、猫の一年は人間の十年に懸け合うと云ってもよろしい。吾等
の寿命は人間より二倍も三倍も短いに係らず、その短日月の間に猫一疋の発達は
十分仕るところをもって推論すると、人間の年月と猫の星霜を同じ割合に打算するのは
はなはだしき誤謬である。第一、一歳何ヵ月に足らぬ吾輩がこのくらいの見識を有してい
るので分るだろう。主人の第三女などは数え年で三つだそうだが、智識の発達から云う
と、いやはや鈍いものだ。泣く事と、寝小便をする事と、おっぱいを飲む事よりほかに何に
も知らない。世を憂い時を憤る吾輩などに較べると、からたわいのない者だ。それだから
吾輩が運動、海水浴、転地療養の歴史を方寸のうちに畳み込んでいたって毫も驚くに足
りない。これしきの事をもし驚ろく者があつたなら、それは人間と云う足の二本足りない
野呂間に極っている。人間は昔から野呂間である。であるから近頃に至って漸々運動の功能
を吹聴したり、海水浴の利益を喋々して大発明のように考えるのである。

わがはい うま まえ こと ころえ だいいちかいすい くすり
吾輩などは生れない前からそのくらいな事はちゃんと心得ている。第一海水がなぜ薬にな
るか云えばちょっと海岸へ行けばすぐ分る事じゃないか。あんな広い所に魚が何疋おる
か分らないが、あの魚が一疋も病気をしして医者にかかった試しがない。みんな健全に泳いで
いる。病気をすれば、からだが利かなくなる。死ねば必ず浮く。それだから魚の往生をあが
ると云って、鳥の薨去を、落ちると唱え、人間の寂滅をごねると号している。洋行をして

インド洋を横断した人に君、魚の死ぬところを見た事がありますかと聞いて見るがいい、誰でもいいえと答えるに極っている。それはそう答える訳だ。いくら往復したって一匹も波の上は今呼吸を引き取った——呼吸ではいかん、魚の事だから潮を引き取ったと云わなければならぬ——潮を引き取って浮いているのを見た者はないからだ。あの渺々たる、あの漫々たる、大海を日となく夜となく続けざまに石炭を焚いて探がしてあるいても古往今来一匹も魚が上がっておらんところをもって推論すれば、魚はよほど丈夫なものに違ないと云う断案はすぐに下す事が出来る。それならなぜ魚がそんなに丈夫なのかと云えばこれまた人間を待つてしかる後に知らざるなりで、訳はない。すぐ分る。全く潮水を呑んで始終海水浴をやっているからだ。海水浴の機能はしかく魚に取って顕著である。魚に取って顕著である以上は人間に取っても顕著でなくてはならぬ。一七五〇年にドクトル・リチャード・ラッセルがブライトンの海水に飛込めば四百四病即席全快と大袈裟な広告を出したのは遅い遅いと笑ってもよろしい。猫といえども相当の時機が到着すれば、みんな鎌倉あたりへ出掛けるつもりでいる。但し今はいけない。物には時機がある。御維新前の日本人が海水浴の機能を味わう事が出来ずに死んだごとく、今日の猫はいまだ裸体で海の中へ飛び込むべき機会に遭遇しておらん。せいては事を仕損んずる、今日のように築地へ打ちぢやられに行つた猫が無事に帰宅せん間は無暗に飛び込む訳には行かん。進化の法則で吾等猫輩の機能が狂瀾怒濤に対して適當の抵抗力を生ずるに至るまでは——換言すれば猫が死んだと云う代りに猫が上がつたと云う語が一般に使用せらるるまでは——容易に海水浴は出来ぬ。

海水浴は追つて実行する事にして、運動だけは取りあえずやる事に取り極めた。どうも二十世紀の今日運動せんのはいかにも貧民のようで人聞きがわるい。運動をせんと、運動せんのではない。運動が出来ないのである、運動をする時間がないのである、余裕がないのだと鑑定される。昔は運動したものが折助と笑われたごとく、今では運動をせぬ者が下等と見做されている。吾人の評価は時と場合に依り吾輩の眼玉のごとく変化する。吾輩の眼玉はただ小さくなつたり大きくなつたりするばかりだが、人間の品階とくると真逆かさまにひっくり返る。ひっくり返つても差し支へはない。物には両面がある、両端がある。両端を叩いて黒白の変化を同一物の上起こすところが人間の融通のきくところである。方寸を逆かさまにして見ると寸方となるところに愛嬌がある。天の橋立を股倉から覗いて見るとまた格別な趣が出る。セクスピヤも千古万古セクスピヤではつまらない。偶には股倉からハムレットを見て、君こりや駄目だよくらいに云う者がないと、文界も進歩しないだろう。だから

運動をわるく云った連中が急に運動がしたくなって、女までがラケットを持って往来をあるき廻ったって一向不思議はない。ただ猫が運動するのを利いた風だなどと笑いさえしなければよい。さて吾輩の運動はいかなる種類の運動かと不審を抱く者があるかも知れんから一応説明しようと思う。御承知のごとく不幸にして機械を持つ事が出来ん。だからボールもバットも取り扱い方に困窮する。次には金がないから買う訳に行かない。この二つの原因からして吾輩の選んだ運動は一文いらず器械なしと名づくべき種類に属する者と思う。そんなら、のそのそ歩くか、あるいは鮪の切身を啣えて駆け出す事と考えるかも知れんが、ただ四本の足を力学的に運動させて、地球の引力に順って、大地を横行するのは、あまり単簡なで興味がない。いくら運動と名がついても、主人の時々実行するような、読んで字のごとき運動はどうも運動の神聖を汚がす者だろうと思う。

もちろん運動でもある刺激の下にはやらんとは限らん。鯉節競争、鮭探しなどは結構だがこれは肝心の対象物があつての上の事で、この刺激を取り去ると索然として没趣味なものになってしまう。懸賞的興奮剤がないとすれば何か芸のある運動がして見たい。吾輩はいろいろ考えた。台所の廂から家根に飛び上がる方、家根の天辺にある梅花形の瓦の上に四本足で立つ術、物干竿を渡る事——これはとうてい成功しない、竹がつるつる滑べって爪が立たない。後ろから不意に小供に飛びつく事、——これはすこぶる興味のある運動のひとつだが滅多にやるとひどい目に逢うから、高々月に三度くらいしか試みない。紙袋を頭へかぶせらるる事——これは苦しいばかりではなはだ興味の乏しい方法である。ことに人間の相手がおらんと成功しないから駄目。次には書物の表紙を爪で引き搔く事、——これは主人に見付かると必ずどやされる危険があるのみならず、割合に手先の器用ばかりで総身の筋肉が働かない。これらは吾輩のいわゆる旧式運動なる者である。新式のうちにはなかなか興味の深いのがある。第一に蟻螂狩り。——蟻螂狩りは鼠狩りほどの大運動でない代りにそれほど危険がない。夏の半から秋の始めへかけてやる遊戯としてはもっとも上乘のものだ。その方法を云うとまず庭へ出て、一匹の蟻螂をさがし出す。時候がいいと一匹や二匹見付け出すのは雑作もない。さて見付け出した蟻螂君の傍へはつと風を切つて馳けて行く。するとすわこそと云う身構をして鎌首をふり上げる。蟻螂でもなかなか健気なもので、相手の力量を知らんうちは抵抗するつもりでいるから面白い。振り上げた鎌首を右の前足でちょっと参る。振り上げた首は軟かいからぐにやり横へ曲る。この時の蟻螂君の表情がすこぶる興味を添える。おやと云う思い入れが充分ある。

面白^{おもしろ}いのはおし^{なつ}いつくつくである。これは夏^{すえ}の末^でにならないと出^こて来^やない。八^{くち}つ口^{ほころ}の綻^なびか
ら秋^{あき}風^{かぜ}が断^{こと}わりなしに膚^{はだ}を撫^なでてはっ^かくし^ぜよ風^ひ邪^ひを引^{ころ}いたと云^さう頃^{かん}熾^おに尾^おを掉^ふり立^たててな
く。善^よく鳴^なく奴^{やつ}で、吾^{わが}輩^{はい}から見^わると鳴^なくのと猫^{ねこ}にとら^ねれるよりほかに天^{てん}職^{しよく}がないと思^{おも}われる
くらいだ。秋^{あき}の初^{はじめ}はこいつを取^しる。これを称^{しょう}して蟬^{せみ}取^{とり}運^{うん}動^{どう}と云^いう。ちよ^ちつと諸^{しよ}君^{くん}に話^わし
てお^おくが^おいやしくも蟬^{せみ}と名^なのつ^いく以上^{じょう}は、地^ち面^{めん}の上^{じょう}に転^{ころ}が^{ころ}つては^おらん。地^ち面^{めん}の上^{じょう}に落^おちてい
るものには必^あず蟻^{あり}がついてい^りる。吾^わ輩^{はい}の取^とるのはこの蟻^{あり}の領^{りょう}分^{ぶん}に寝^ね転^{ころ}んでい^りる奴^ねではない。
高^{たか}い木^きの枝^{えだ}にとま^えつて、おし^{れん}いつくつくと鳴^{じゆう}いでい^とる連^{れん}中^{じゆう}を捕^とえ^らるのである。

これ^{はく}もついで^{がく}だから博^{にんげん}学^きなる人^{にん}間^{げん}に聞^ききたいが^なあ^なれは^なおし^ないつくつくと鳴^なくのか、つくつくお
し^ないと鳴^なくのか、その解^{かい}釈^{しゃく}次^じ第^{だい}によ^せつては^せみ^{けん}研^{けん}究^{きゆう}上^{じゆう}少^{すく}な^{かん}から^{けい}ざる^{おも}関^{かん}係^{けい}があ^{おも}ると思^{おも}う。
人^{にん}間^{げん}の猫^{ねこ}に優^{まさ}るところは^{そん}こ^みな^ずと^ほこ^{てん}ころ^{てん}に存^{ぞん}す^{ぞん}るので、人^{にん}間^{げん}の自^みら^み誇^ほる^{てん}点^{てん}も^また^かよ^うな^な点^{てん}に
あ^いる^まの^そだ^きから、今^{いま}即^{そく}答^{とう}が^でき^{かん}出^がな^がい^{かん}なら^がよ^かく^が考^{かん}え^がて^がお^せみ^といた^うら^んよ^んか^らう。も^もつ^もと^と蟬^{せみ}取^とり^うん^{どう}運^{うん}動^{どう}上^{じゆう}
は^はど^どち^ちに^にし^して^ても^も差^さし^つ支^{つか}え^えは^はな^ない。た^ただ^だ声^こを^えし^きる^のべ^いに^い木^きを^の上^ぼつ^いて^い行^{せん}つ^ぼう^むち^{ちゆう}う^うな^なつ^て
て^て鳴^ないで^いる^ると^ところ^をう^うん^とと^と捕^とえ^らる^ばか^りだ。こ^これ^はも^もつ^もと^と簡^{かん}略^{りやく}な^な運^{うん}動^{どう}に^み見^みえ^てな^なか^なか^な
ほ^ほね^おの^わ折^われ^る運^{うん}動^{どう}で^ある。吾^わ輩^{はい}は^よん^{ほん}四^し本^{ぽん}の^あし^{ゆう}の^{だい}ち^{ちゆう}足^{そく}を^{こと}有^あし^てい^るから^ほ大^{だい}地^ちを^ゆ行^{こと}く^は事^{こと}に^おいて^はあ^あえて^ほか^か
の^の動^{どう}物^{ぶつ}に^おは^お劣^りると^は思^{おも}わ^ない。少^{すく}な^{かん}く^もと^も二^に本^{ほん}と^し四^し本^{ほん}の^{すう}が^くて^きち^{しき}し^きき^はん^{だん}断^{だん}断^{だん}して^て見^みて^て人^{にん}間^{げん}に
は^ま負^まけ^ない^さつ^もり^であ^る。し^しか^し木^き登^{のぼ}り^に至^{いた}つて^は大^{だい}分^{ぶん}吾^わ輩^{はい}よ^り巧^{こう}者^{しゃ}な^や奴^{やつ}が^ほん^しよ^くさ^る
は^べつ^つの^{もの}別^{べつ}物^{ぶつ}と^して、猿^{ぼん}の^ま末^ま孫^{そん}た^る人^{にん}間^{げん}に^あな^なか^なか^な侮^ある^べか^らざる^て手^て合^あい^がい^る。元^{げん}来^{らい}が^{いん}引^{いん}力^{りよく}に^さ
逆^さら^むつて^の無^む理^りな^{じぎ}事^じ業^{ぎやう}だ^から^出来^でな^くて^も別^{べつ}段^{だん}の^ち恥^ち辱^{じよく}と^は思^{おも}わ^なん^けれ^ども、蟬^{せみ}取^とり^{うん}動^{どう}上^{じゆう}に
は^ふべ^ん少^あな^さか^らざる^ふ不^ふ便^{べん}を^{あた}与^{さい}え^{わい}る。幸^{さい}に^つ爪^{つめ}と^い云^いう^り利^り器^きが^ある^ので、ど^どう^かこ^うか^か登^{のぼ}り^はす^るもの
の、は^みた^で見^みる^ほど^{らく}楽^{らく}で^はご^ござ^らん。の^みな^らず^と蟬^{せみ}は^と飛^かぶ^きる^{もの}で^ある。螞^かま^きり^くん^ちが^ち違^{ちが}つて^{ひと}一^{ひと}
び^{さい}飛^{さい}んで^{さい}ま^いつた^が最^{さい}後^ご、せ^せつ^せか^くの^か木^き登^{のぼ}り^も、木^き登^{のぼ}ら^ずと^何の^{なん}択^えむ^らと^ころ^なし^と云^いう^ひ悲^ひ運^{うん}に
際^{さい}会^{かい}す^る事^{こと}が^ない^とも^も限^{かぎ}ら^ん。最^{さい}後^ごに^{とき}時^{とき}々^ど々^ど蟬^{せみ}から^{しょう}小^{しょう}便^{べん}を^きか^げら^れる^危険^{けん}が^ある。あ^あの^の小^{しょう}便^{べん}が
や^めや^ねと^もす^ると^に眼^にを^{しか}覗^{しか}つて^たし^よぐ^つて^くる^よう^だ。逃^にげ^るの^は仕^{しか}方^たが^ない^から、ど^どう^か小^{しょう}便^{べん}ば
か^りは^た垂^たれ^んよ^うに^{いた}致^{いた}し^{たい}。飛^まぶ^ま間^ま際^{さい}に^ま溺^まり^を仕^{つか}ま^する^のは^いっ^{たい}体^{たい}ど^う云^いう^{しん}理^り的^{てき}状^{じゆう}態^{たい}の
生^{せい}理^り的^{てき}器^き械^{がい}に^およ^ぶ及^{えい}ぶ^す影^{えい}響^{きやう}だ^{らう}。や^やは^りせ^せつ^せな^なさ^のあ^あま^りか^かし^らん。あ^ある^いは^は敵^{てき}の^ふ不^ふ意^いに^で
出^でて、ち^ちよ^ちつと^と逃^にげ^る出^です^る余^よ裕^{ぎよ}を^つく^るた^めの^{ほう}方^{ほう}便^{べん}か^しら^ん。そ^そう^そす^ると^い鳥^い賊^{さく}の^い墨^{すみ}を^は吐^はき、ベ^べラ^らン
メ^めー^の刺^し物^{ぶつ}を^ほり^もの^しゆ^じん^らテ^{てん}ゴ^ごろ^うと^たぐ^いお^おな^なこ^こう^{こう}も^もく^くい^いじ^じこ^{こう}う^う
類^{れい}と^と同^{どう}じ^じ綱^{きやう}目^{もく}に^い入^いる^べき^き事^じ項^{きやう}と^なる。

これも蝉学上せみがくじょうゆる 忽まかせにすべからざる問題もんだいである。充分じゅうぶんけんきゅう 研究すればこれだけでたしかに
 博士論文はかせろんぶん の価値かちはある。それは余事よじだから、そのくらいにしてまた本題ほんだいに帰る。蝉せみのもつと
 も集注しゅうちゅう するのは——集注しゅうちゅう がおかしければ集合しゅうごう だが、集合しゅうごう は陳腐ちんぷだからやはり集注しゅうちゅう にする。
 ——蝉せみのもつとも集注しゅうちゅう するのは青桐あおぎりである。漢名かんめいを梧桐ごとうと号ごうするそうだ。ところがこの青桐
 は葉はが非常ひじょうに多い、しかもその葉はは皆みな 団扇みんうちわくらいな大おおきであるから、彼等かれらが生い重かさなると
 枝えだがまるで見えなくらい茂しげっている。これがはなはだ蝉取せみとり運動うんどうの妨害ぼうがいになる。声こえはすれ
 ども姿すがたは見えなく云いう俗謡ぞくようはとくに吾輩わがはいのために作つくった者ものではなからうかと怪あやしまれるく
 らいである。吾輩しかたは仕方がないからただ声しを知るしべに行く。下したから一いっけん間けんばかりのところで梧桐
 は注文ちゅうもん通り二ふた叉またになっているから、ここで一ひと休息やすみして葉裏はうらから蝉せみの所在地しょじいちを探偵たんていする。もつ
 ともここまで来るうちに、がさがさと音おとを立てて、飛び出す気早たな連中れんちゅう 中ちゅう がある。一羽いちわ飛ぶと
 もういけない。真似まねをする点てんにおいて蝉せみは人間にんげんに劣おとらぬくらい馬鹿ばかである。あとから続々ぞくぞく 飛
 び出す。漸々ようよう 二とう叉ちやくに到じぶん着まんじゆせきする時分へんせいには満樹まんじゆせき寂へんせいとして片声ことをとどめざる事ことがある。かつてこ
 こまで登のぼって来て、どこをどう見廻みまわしても、耳みみをどう振ふつても蝉気せみけがないので、出直でなおすのも
 面倒めんどうだからしばらく休息きゅうそく しよう、又またの上うえに陣取じんどって第二だいにの機会きかいを待ち合あわせていたら、いつ
 の間まにか眠ねむくなって、つい黒甜郷裡こくてんきょうりに遊あそんだ。おやと思おもって眼めが醒さめたら、二に叉ちやくの黒甜郷裡こくてんきょうり
 から庭にわの敷石しきいしの上おへどたりと落おちていた。しかし大たい概がいは登たびに一つは取とって来る。ただ
 興きよう味みの薄うすい事ことには樹きの上くちで口くわに啣くわえてしまわなくてはならん。だから下したへ持もって来て吐はき出だ
 す時ときは大方おおかた死しんでいる。

いくらじゃらしても引ひ搔かいても確然かくぜんたる手答てごたえがない。蝉取せみとりの妙味みょうみはじっと忍しのんで行いって
 おいしい君くんが一生いっしょう懸命けんめいに尻尾しっぽを延のばしたり縮ちぢましたりしているところを、わっと前足まえあしで抑おさえ
 る時ときにある。この時ときつくつく君くんは悲鳴ひめいを揚あげて、薄うすい透とう明めいな羽根はねを縦じゅう横おう無む尽じんに振ふるう。その
 早はやい事こと、美事みごとなる事ことは言語道断ごんごどうだん、実じつに蝉世界せみせかいの一いち偉い観かんである。余よはつくつく君くんを抑おさえる度たびに
 いつでも、つくつく君くんに請せい求きゅうしてこの美術びじゆつ的てきえんげい演み芸ぎを見せてもらう。それがいやになるとご
 免めんを蒙こうむって口くちの内うちへ頬張ほおばってしまう。蝉せみによると口くちの内うちへ這入はいってまで演み芸ぎをつづけている
 のがある。蝉取せみとりの次つぎにやる運動うんどうは松滑まつすべりである。これは長ながくかく必要ひつようもないから、ちよつ
 と述のべておく。松滑まつすべりと云いうと松まつを滑すべるように思おもうかも知しれんが、そうではないやはり木登きのぼり
 の一いっしゆ種しゆである。ただ蝉取せみとりは蝉せみを取るために登のぼり、松滑まつすべりは、登のぼる事ことを目的もくてきとして登のぼる。これ
 が両者りょうしやの差さである。元来がんらい松まつは常磐ときわにて最明寺さいみょうじの御馳走ごちそうをしてから以来いらい今日こんにちに至いたるまで、い
 やにごつごつしている。従したがって松まつの幹みきほど滑ならないものはない。手懸てがかりのいいものはない。

あしがか
足懸りのいいものはない。——換言すれば爪懸りのいいものはない。その爪懸りのいい幹へ
いっきかせい か あが
一気呵成に駆け上って、おいて駆け下がる。駆け下がるには二法ある。一はさかさ
あたま じめん む お のぼ しせい おした お
になって頭を地面へ向けて下りてくる。一は上ったままの姿勢をくずさずに尾を下にして降
にんげん と し りょうけん
りる。人間に問うがどっちがむずかしいか知ってるか。人間のあさはかな了見では、どうせ
したむき か お ほう らく まちが きみら よしつね
降りるのだから下向に駆け下りる方が楽だと思っただろう。それが間違ってる。君等は義経が
ひよどりごえ お こころえ ねこ むろん
鶉越を落としたことだけを心得て、義経でさえ下を向いて下りるのだから猫なんぞは無論
し む けいべつ つめ
下た向きでたくさんだと思っただろう。そう軽蔑するものではない。猫の爪はどっちへ向いて
は うえし お とびぐち のもの ひ よ
生えていると思う。みんな後ろへ折れている。それだから鳶口のように物をかけて引き寄せ
こと でき ぎやく お だ ちから
事は出来るが、逆に押し出す力はない。

いまわがはい まつ き いきおい か のぼ がんらいちじょう もの
今吾輩が松の木を勢よく駆け登ったとする。すると吾輩は元来地上の者であるから、
しぜん けいこう い なが しょうじゅ いただき とど ゆる そうい
自然の傾向から云えば吾輩が長く松樹の巔に留まるを許さんに相違ない、ただおけば
かなら お てばな はやす なんら しゅだん
必ず落ちる。しかし手放して落ちては、あまり早過ぎる。だから何等かの手段をもってこの
自然の傾向を幾分かゆるめなければならん。これ即ち降りるのである。落ちると降りるの
たいへん ちがい のようだが、その実思っただほどの事ではない。落ちるのを遅くすると降りるの
はや
で、降りるのを早くすると落ちる事になる。落ちると降りるのは、ちとりの差である。吾輩は
うえ
松の木の上から落ちるのはいやだから、落ちるのを緩めて降りなければならん。即ちあるも
のをもつて落ちる速度に抵抗しなければならん。吾輩の爪は前申す通り皆後ろ向きであるか
ら、もし頭を上にして爪を立てればこの爪の力は悉く、落ちる勢に逆って利用出来る
わけである。従って落ちるが変じて降りるになる。実に見易き道理である。しかるにまた身を
さか よしつねりゅう まつ きごえ みたま やく た すべ
逆にして義経流に松の木越をやってみ給え。爪はあっても役には立たん。ずるずる滑っ
て、どこにも自分の体量を持ち答える事は出来なくなる。ここにおいてかせっかく降りよう
と企てた者が変化して落ちる事になる。この通り鶉越はむずかしい。猫のうちでこの芸が
出来る者は恐らく吾輩のみであろう。それだから吾輩はこの運動を称して松滑りと云うので
ある。最後に垣巡りについて一言する。主人の庭は竹垣をもって四角にしきられている。
えんがわ へいこう いっぺん はっくけん さゆう そうほうともんげん す
椽側と平行している一片は八九間もあろう。左右は双方共四間に過ぎん。今吾輩の云った
垣巡りと云う運動はこの垣の上を落ちないように一周するのである。これはやり損う事も
ままあるが、首尾よく行くとお慰になる。ことに所々に根を焼いた丸太が立っているか
ら、ちょっと休息に便宜がある。今日は出来がよかったので朝から昼までに三返やって見た
が、やるたびにうまくなる。うまくなる度に面白くなる。

とうとう四返繰り返したが、四返目に半分ほど巡りかけたら、隣の屋根から鳥が三羽飛んで来て、一間ばかり向うに列を正してとまった。これは推参な奴だ。人の運動の妨をする、ことにどこの鳥だか籍もない分在で、人の塀へとまるというほうがあるもんかと思っただから、通るんだおい除きたまえと声をかけた。真先の鳥はこっちを見てにやにや笑っている。次のは主人の庭を眺めている。三羽目は嘴を垣根の竹で拭いている。何か食って来たに違いない。吾輩は返答を待つために、彼等に三分間の猶予を与えて、垣の上に立っていた。鳥は通称を勘左衛門と云うそうだが、なるほど勘左衛門だ。吾輩がいくら待っても挨拶もしなければ、飛びもしない。吾輩は仕方がないから、そろそろ歩き出した。すると真先の勘左衛門がちよいと羽を広げた。やっとならぬ威光に恐れて逃げるなどと思ったら、右向から左向に姿勢をかえただけである。この野郎！地面の上ならその分に捨ておくのではないが、いかんせん、たださえ骨の折れる道中に、勘左衛門などを相手にしている余裕がない。といってまた立留まって三羽が立ち退くのを待つのもいやだ。第一そう待っては足がつづかない。先方は羽根のある身分であるから、こんな所へはとまりつけている。従って気に入ればいつまでも逗留するだろう。こっちはこれで四返目たださえ大分労れている。いわんや綱渡りにも劣らざる芸当兼運動をやるのだ。何等の障害物がなくてさえ落ちんとは保証が出来ぬのに、こんな黒装束が、三個も前途を遮っては容易ならざる不都合だ。いよいよとなれば自ら運動を中止して垣根を下りるより仕方がない。面倒だから、いっそさよう仕ろうか、敵は大勢の事ではあるし、ことにはあまりこの辺には見馴れぬ人体である。

くちばしおつとんなんてんぐもうご口嘴が乙に尖がって何だか天狗の啓し子のようなだ。どうせ質のいい奴でないには極っている。退却が安全だろう、あまり深入りをして万一落ちでもしたらなおさら恥辱だ。と思っっていると左向をした鳥が阿呆と云った。次のも真似をして阿呆と云った。最後の奴は御鄭寧にも阿呆阿呆と二声叫んだ。いかに温厚なる吾輩でもこれは看過出来ない。第一自己の邸内で鳥輩に侮辱されたとあっては、吾輩の名前にかかわる。名前はまだないから係わりようがなかろうと云うなら体面に係わる。決して退却は出来ない。諺にも鳥合の衆と云うから三羽だって存外弱いかも知れない。進めるだけ進めと度胸を据えて、のそのそ歩き出す。鳥は知らん顔をして何か御互に話をしている様子だ。いよいよ肝癩に障る。垣根の幅がもう五六寸もあつたらひどい目に合せてやるんだが、残念な事にはいくら怒っても、のそのそとしかあるかれない。ようやくの事先鋒を去る事約五六寸の距離まで来てもう一息だと思つと、勘左衛門は申し合せたように、いきなり羽搏をして一二尺飛び上がった。その風が

突然余の顔を吹いた時、はっと思つたら、つい踏み外ずして、すとんと落ちた。これはしくじつた垣根の下から見上げると、三羽共元の所にとまって上から嘴を揃えて吾輩の顔を見下している。図太い奴だ。睨めつけてやったが一向利かない。背を丸くして、少々唸つたが、ますます駄目だ。俗人に靈妙なる象徴詩がわからぬごとく、吾輩が彼等に向つて示す怒りの記号も何等の反応を呈出しない。考へて見ると無理のないところだ。吾輩は今まで彼等を猫として取り扱っていた。それが悪るい。

猫ならこのくらいやればたしかに応えるのだが生憎相手は鳥だ。鳥の勘公とあつて見れば致し方がない。実業家が主人苦沙弥先生を圧倒しようと思つて、西行に銀製の吾輩を進呈するがごとく、西郷隆盛君の銅像に勘公が糞をひるようなものである。機を見るに敏なる吾輩はどうてい駄目と見て取つたから、奇麗さっぱりと椽側へ引き上げた。もう晩飯の時刻だ。運動もいいが度を過ぎると行かぬ者で、からだ全体が何となく緊りがなく、ぐたぐたの感がある。のみならずまだ秋の取り付きで運動中に照り付けられた毛ごろもは、西日を思ふ存分吸収したと見えて、ほてつてたまらない。毛穴から染み出す汗が、流れればと思うのに毛の根に膏のようにねばり付く。背中がむずむずする。汗でむずむずするのと蚤が這つてむずむずするのは判然と区別が出来る。口の届く所なら噛む事も出来る、足の達する領分は引掻く事も心得にあるが、脊髄の縦に通う真中と来たら自分の及ぶ限でない。こう云う時には人間を見懸けて矢鱈にこすり付けるか、松の木の皮で充分摩擦術を行ふか、二者その一を択ばんと不愉快で安眠も出来兼ねる。人間は愚なものであるから、猫なで声で——猫なで声は人間の吾輩に対して出す声だ。吾輩を目安にして考へれば猫なで声ではない、なでられ声である——よろしい、とにかく人間は愚なものであるから撫でられ声で膝の傍へ寄つて行くと、大抵の場合において彼もしくは彼女を愛するものと誤解して、わが為すままに任せるのみか折々は頭さえ撫でてくれるものだ。しかるに近来吾輩の毛中のみと号する一種の寄生虫が繁殖したので滅多に寄り添うと、必ず頸筋を持って向うへ抛り出される。わずかに眼に入るか入らぬか、取るにも足らぬ虫のために愛想をつかしたと見える。手を翻せば雨、手を覆せば雲とはこの事だ。高がのみの千疋や二千疋でよくまあこんなに現金な真似が出来たものだ。

人間世界を通じて行われる愛の法則の第一條にはこうあるそうだ。——自己の利益になる間は、すべからず人を愛すべし。——人間の取り扱が俄然豹変したので、いくら痒ゆ

くても人^{じんりょく}力^{りよう}を利用する事^{こと}は出来^{でき}ん。だから第二^{だいに}の方法^{ほうほう}によって松皮^{しょうひ}摩擦^{まさつ}法^{ほう}をやるよりほかに
分別^{ぶんべつ}はない。しからばちょっとこすって参^{まい}ろうかとまた橡^{えんがわ}側^おから降^おりかけたが、いやこれも
利害^{りがい}相^{あい}償^{あいつぐ}わぬ愚^ぐ策^{さく}だと心^{こころ}付^づいた。と云^いうのはほかでもない。松^{まつ}には脂^{やに}がある。この脂^{あぶら}たるす
こぶる執^{しゅう}着^{ちやく}心^{しん}の強^{つよ}い者^{もの}で、もし一^{ひと}たび、毛^けの先^{さき}へくっ付^つけようものなら、雷^{かみなり}が鳴^なっても
バルチック艦^{かんたい}隊^{ぜんめつ}が全^{けつ}滅^{はな}しても決^{ごほん}して離^{はや}れない。しかのみならず五^ご本の毛^{ほんのけ}へこびりつくが早^{はや}
か、十^{じゅう}本^{ほん}に蔓^{まん}延^{えん}する。十^{じゅう}本^{ほん}やられたなと気^きが付^つくと、もう三十^{さんじゅう}本^{ほん}引^ひっ懸^かっている。吾^{わが}輩^{はい}は
淡泊^{たんぱく}を愛^{ちや}する茶^{じん}人^{てん}的^{てき}猫^{ねこ}である。こんな、しつこい、毒^{どく}悪^{あく}な、ねちねちした、執^{しゅう}念^{ねん}深^{ぶか}い奴^{やつ}は
大^{だい}嫌^{きら}いだ。たとい天下^{てんか}の美^び猫^{みょう}といえどもご免^{めん}蒙^{こう}る。いわんや松^{まつ}脂^{やに}においてをやだ。車^{くるま}屋^やの
黒^{くろ}の両^{りょう}眼^{がん}から北^{きた}風^{かぜ}に乗^{じよう}じて流^{なが}れる目^め糞^{くそ}と扱^{えら}ぶところなき身^み分^{ぶん}をもって、この淡^{たん}灰^{かい}色^{しよく}の
毛^け衣^{ごころ}を大^{だい}なしにすとは怪^けしからん。少^{すこ}しは考^{かんが}えて見^みるがいい。といったところできゃつな
かなか考^{きづ}える気^{かい}遣^{かい}はない。あの皮^{かわ}のあたりへ行^いって背^せ中^{なか}をつけるが早^{はや}いか必^{かな}ずべたりとおい
でになるに極^{きま}っている。こんな無^む分別^{ぶんべつ}な頓^{とん}痴^ち奇^きを相^あ手^てにしては吾^{わが}輩^{はい}の顔^{かお}に係^{かか}わるのみならず、
引^ひいて吾^{わが}輩^{はい}の毛^け並^{なみ}に関^{かん}する訳^{わけ}だ。いくら、むずむずしたって我^が慢^{まん}するよりほかに致^{いた}し方^{かた}はある
まい。しかしこの二^に方法^{ほうほう}共^{とも}実^{じつ}行^{こう}出来^こんとなるとはなはだ心^{こころ}細^{ほそ}い。今^{いま}において一^{ひと}工^{とく}夫^{ふう}してお
かんとしまいにはむずむず、ねちねちの結果^{けつ}病^{びやう}氣^きに罹^{かか}るかも知^しれない。

何^{なに}か分別^{ぶんべつ}はあるまいかなと、後^あと足^{あし}を折^おって思^し案^{あん}したが、ふと思^{おも}い出^だした事^{こと}がある。うちの
主^{しゅ}人^{じん}は時^{とき}々^{ときどき}手^て拭^{ぬぐ}い^{シャボン}と石^{いし}鹼^{せん}をもつて飄^{ひょう}然^{ぜん}といずれへか出^でて行^ゆく事^{こと}がある、三^{さん}四^し十^{じゅう}分^{ぶん}して帰^{かえ}
たところを見^みると彼^{かれ}の朦^{もう}朧^{ろう}たる顔^{がん}色^{しよく}が少^{すこ}しは活^{かつ}氣^きを帯^おびて、晴^はれやかに見^みえる。主人^{しゅじん}のよう
な汚^む苦^くしい男^{おとこ}にこのくらいな影^{えい}響^{きやう}を与^{あた}えるなら吾^{わが}輩^{はい}にはもう少^{すこ}し利^き目^めがあるに相^{そう}違^いない。
吾^{わが}輩^{はい}はただでさえこのくらいな器^き量^{りやう}だから、これより色^{いろ}男^{おとこ}になる必要^{ひつ}要^{よう}はないようなものの、
万^{まん}一^{いち}病^{びやう}氣^きに罹^{かか}って一^{いっ}歳^{さい}何^{なん}が月^{げつ}で夭^{よう}折^{せつ}するような事^{こと}があつては天下^{てんか}の蒼^{そう}生^{せい}に対^{たい}して申^{もう}し訳^{わけ}が
ない。聞^きいて見^みるとこれも人^{にん}間^{げん}のひま潰^{つぶ}しに案^{あん}出^{しゅつ}した洗^{せん}湯^{とう}なるものだそうだ。どうせ人^{じん}間^{げん}の
作^{つく}ったものだから碌^{ろく}なものでないには極^{きま}っているがこの際^{さい}の事^{こと}だから試^{ため}しに這^{はい}入^いって見^みるの
もよかろう。やっ見て功^{こう}験^{けん}がなければよすまでの事^{こと}だ。しかし人^{じん}間^{げん}が自^じ己^このた^{ため}めに設^{せつ}備^びした
浴^{よく}場^{じやう}へ異^い類^{るい}の猫^{ねこ}を入^いれるだけの洪^{こう}量^{りやう}があるだろうか。これが疑^ぎ問^{もん}である。主人^{しゅじん}がすまして
這^こ入^こるくらいのところだから、よもや吾^{わが}輩^{はい}を断^きわる事^{こと}もなかろうけれども万^{まん}一^{いち}お氣^{どく}の毒^{どく}様^{さま}を食^く
うような事^{こと}があつては外^{がい}聞^{ぶん}がわるい。これは一^{ひと}先^まず容^{ひと}子^まを見^{よう}に行^こくに越^こした事^{こと}はない。見た上^{うえ}
でこれならよいと当^{あた}りが付^ついたら、手^て拭^{くわ}を啣^とえて飛^とび込^こんで見^みよう。とここまで思^し案^{さだ}め
上^かでのそのそと洗^で湯^かへ出^で掛^かけた。